

木村定三コレクション中国陶磁目録

(作品解説)

沖縄県立芸術大学 森 達也

凡例

- ・本目録は、愛知県美術館所蔵「木村定三コレクション」の中から中国陶磁を掲載し、解説を付したものである。
- ・各作品名は、調査者の見解を勘案して決定した。
- ・各作品のデータは、掲載番号、作品名、制作年代、寸法 (cm)、産地、コレクション番号、受入時名称の順に記載した。画像は、正面、底面を掲載し、形状に応じて必要なものを補った。
- ・掲載は年代順とし、さらに用途、産地に分けた。
- ・作品解説は、森達也氏(沖縄県立芸術大学 教授)が執筆した。引用文中、判読が困難な文字は□を当てた。
- ・森氏による調査は2016 (平成28) 年より始まり、柴名彩香 (愛知県美術館学芸員) が補助した。さらに、矢島律子氏 (町田市立博物館) の助言、協力を得、また高木久子の調査補助を受けた。

編集 愛知県美術館 柴名彩香



1. 青磁鶏首壺^{せいじけいしゅこ} 東晋時代（4～5世紀）

高さ20.4、口径8.4、幅20.7、底径12.9～13.5

浙江省

M1236（烏口水注）

鶏首形の注口、龍形の把手と角型の耳を持つ水注形の青磁壺で、盤状の口縁には鉄斑文が施されている。日本ではこの器形を天鶏壺と呼ぶが、古代中国には、東南方に桃都という巨大な木が生えた山があり、樹上には天鶏がいて日の出の時に最初に鳴き、それに続いて天下の鶏が鳴き始めるという伝説があった。中国南方ではこの天鶏をモチーフとしたと思われる鶏首壺が西晋時代から初唐頃（3世紀～7世紀）まで副葬用器（明器）として盛んに作られた。本作品は東晋時代（317～420年）に位置づけられる鶏首壺で、釉や鉄斑文の様子から浙江省北部の産である可能性が高い。



2. 青磁四管挿器^{せいじしかんそうき} 南朝時代（6世紀）

高さ12.7、口径5.7～6.1、底径6.9

浙江省または福建省

M2250（青磁四管燈器）

円盤状の台を二段重ねた上に小壺を乗せ、その上に方板を置き四本の瓶形の蠟燭立を配した燭台。全面にオリーブ色の青磁釉を施している。浙江省や福建省で南朝後半期の墓などから稀に出土する器種で、実用品ではなく副葬用器として作られたものである。



3. 青磁五管瓶

北宋時代～南宋時代（11世紀～12世紀）

口径までの高さ24.0、嘴までの高さ25.2、
口径6.9～7.2、胴径16.2、底径8.8

龍泉窯

M1728（青磁多嘴壺）

体部を5段に屈曲させ、各段に劃花技法により蓮弁文を描いている。上から2段目には口部が輪花状になった管を5本貼り付けている。口縁部は直口で、本来は蓋が伴っていたはずであるが今は失われている。龍泉窯では北宋時代から元時代頃に肩に5つの管状の口を張り付けた五管瓶を盛んに生産しているが、墨書で「谷（穀）倉」の文字が記された出土資料から、五穀豊穰を祈念するための副葬用器であったことがわかる。



4. 青磁六管瓶

南宋時代（12世紀）

総高22.6

（蓋）高さ5.8、口径9.4

（身）高さ17.7、口径6.8、胴径12.0、最大幅12.6、底径7.3

龍泉窯

M1729（青磁六管瓶）

M1728と同じ副葬用器として作られた瓶であるが、管は6本で、体部の屈曲が上半部に集中しており、器形はやや新しい様相を示している。宝珠形の鈕がついた傘形の蓋が伴っている。六管瓶は類例が少ない。





5. 青磁蓮弁文碗

南宋時代末～元時代（13世紀後半～14世紀初）

高さ6.2、口径14.7、底径4.5

龍泉窯

M566（砧手（篠木）青磁茶碗）

やや外反する碗形の体部の全面に、31条の蓮弁を彫り出している。蓮弁文碗は、南宋中期以降の龍泉窯青磁の代表的な器種であるが、早い段階の製品は蓮弁の幅が広く、時代が下がるに従って蓮弁が細くなる。本作品は蓮弁の幅から見て南宋末期から元時代初期に位置づけられる。



6. 青磁蓮弁文碗

南宋時代末～元時代（13世紀後半～14世紀初）

高さ5.1、口径11.2、底径3.1

龍泉窯

M1141（碁青磁篠木茶碗）

M566と同じ龍泉窯青磁の蓮弁文碗であるが、本作品の口縁形は直口である。蓮弁の幅は細目であり、南宋末期から元時代初期に位置づけられる。この時期の龍泉窯の青磁蓮弁文碗は、M566のような端反り形よりも本作品のような直口形の方が圧倒的に多い。



せいじゆうがいこつぽ
7. 青磁有蓋小壺
元時代～明時代初（14世紀）

総高6.3

（蓋）高さ1.6、幅3.5

（身）高さ4.7、口径2.8、底径3.0

龍泉窯

M1120（青磁香合（天龍寺青磁））

球形の体部に短頸の直口縁と突出した底部がつく小形壺。一文字形で小さく突出した鈕をもつ蓋を伴う。中国では香料や薬、化粧品など小品を入れる容器として作られたものと思われるが、日本では主に香合として用いられた。安政二年（1855）に出版された『形物香合相撲』番付では、「大小有 青磁 酒會」として東三段目二十位に位置づけられている。



せいじそうぎよもんはち
8. 青磁双魚文鉢
南宋時代後期～元時代（13世紀後半～14世紀初）

高さ4.8、口径20.4、底径8.8

龍泉窯

M1332（青磁貼花双魚文平鉢）

内底に貼花文であらわされた二匹の魚が配され、外面に蓮弁文が彫り出された鐺状口縁の小形の鉢。龍泉窯では、南宋時代後期から元時代にかけて盛んに作られた器種で、粗製化したものは明時代まで作り続けられた。「魚」と「余」は中国語の発音「yu」が同じであることから、双魚文は「年年有余」（意：毎年余裕がある生活が送れる＝金持ちになる）という意味の吉祥文である。



せいじいんかぼたんかもんこつぼ
9. 青磁印花牡丹花文小壺
 元時代（13世紀末～14世紀中頃）

高さ7.3、口径2.7、胴径8.4、底径3.3

龍泉窯

M1409（砧青磁浮牡丹文茶入 牙蓋）

短頸がついた球形胴の小壺。胴部の上半には牡丹花文、下半には蓮弁文が印花技法によって施されている。底部は平底で無釉である。上半部と下半部は、それぞれ別の外型に磁土を押し込んで作り、上下を継いで胴部を造形している。



せいほくじいんかきつかがたごうす
10. 青白磁印花菊花形合子
 南宋時代（12～13世紀）

総高3.4

（蓋）高さ1.6、口径4.9

（身）高さ2.0、口径4.3、底径4.5

景德鎮窯

M2259（影青菊花模様合子）

側面に花卉文を巡らし、蓋の上面には印花の菊花文を散らした合子である。青白磁は北宋時代から元時代にかけて景德鎮窯で盛んに生産された青みがかった透明釉がかけられた白磁の一種で、釉が厚く掛けられた部分の青さが影のように濃くなることから「影青」とも呼ばれる。青白磁の合子は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて日本に盛んに輸入され、当時流行した末法思想に基づいて日本各地で盛んに築かれた経塚から出土することが多い。





せいほくじきつかがたごうす
11. 青白磁菊花形合子
 北宋時代末～南宋時代（11～12世紀）

総高3.1
 （蓋）高さ1.5、口径5.6
 （身）高さ1.9、口径4.8、底径3.8

景德鎮窯
 M2261（影青輪花合子）

M2259と同じ景德鎮窯の青白磁合子であるが、本作品は外型を用いて蓋全体が菊花形に造形されている。



はくじひきごがたすいぢゆう
12. 白磁瓢形水注
 元時代（14世紀）

最大高12.0、胴高11.5、口径1.9、幅10.7、底径5.4
 景德鎮窯

M1557（元白磁龍把手瓢水注）

瓢箪形の体部に弧を描いて長くのびる注口と、龍形の把手が付けられた小形の水注。底部は平底である。瓢形の体部は上部下部ともに中央に胴継痕が認められる。1323年に韓国の新安沖で沈没した貿易船「新安沈船」から類品が引き揚げられている。





せいほくじごうす
13. 青白磁合子
南宋時代（12～13世紀）

総高4.0

（蓋）高さ2.0、口径5.5

（身）高さ2.4、口径4.8、底径4.0

福建

M2260（饅頭形合子）

福建省各地の陶磁産地では南宋時代に景德鎮の青白磁を模した製品が盛んに生産された。本作品は、やや粗質の胎土や底部の造形などから福建で模された青白磁合子と考えられる。



せいじいんかほうそうげからくさもんわん
14. 青磁印花宝相華唐草文碗
北宋時代（11世紀～12世紀初）

高さ4.9、口径11.2～11.4、底径3.5

耀州窯系（河南）

M1143（青磁蓋茶碗）

内面に宝相華唐草文が印花で施された小形の青磁碗。底部には砂粒が付着している。陝西省耀州窯の北宋時代の印花文青磁と類似するが、施文や胎土がやや粗いため、同時代に耀州窯青磁の技術が伝播した河南省あたりの青磁窯で生産されたものと考えられる。





こくゆうてっさいそうかもんへい
15. 黒釉鉄彩草花文瓶
 金時代（12世紀～13世紀）

高さ23.8、口径3.2、胴径19.8、底径9.7

磁州窯系

M1679（鉄釉絵壺）

全面に黒釉を施した上に褐釉または鉄顔料で草花文を描いた球形胴の小口瓶。黒釉鉄彩は、河北、河南、山西、山東など華北一帯に広がっていた磁州窯系の陶磁産地で金時代から元時代頃（^{じやうめい}）に盛んに用いられた装飾技法で、日本では「鏤花」と呼んで珍重した。



たいひさんてんもく
16. 玳瑁盞天目
 南宋時代（12世紀～13世紀）

高さ6.1、口径11.7、底径3.5

吉州窯

M1137（玳瑁盞天目茶碗 大牡丹文）

内面は黒釉をかけた上に切紙の花文様を貼り、その上から黄釉を掛けて焼造し、黄釉地に黒色の花文を浮き上がらせている。外面は黒釉の上に黄釉を斑点状に施している。外面の模様が鼈甲に似るため、「玳瑁盞」または「鼈盞」と呼ばれることが多いが、内面の花文から「梅花天目」とされることもある。吉州窯は江西省南部の吉安市永和鎮に位置し、唐末五代の頃から白磁や青磁などを生産し、南宋時代になるとさまざまな装飾をほどこした天目茶碗を焼造した。





17. 黒釉杯^{こくゆうはい}

南宋時代（12世紀～13世紀）

高さ3.8、口径8.2、底径3.0

建窯

M2223（柿天目酒盃）

底部を除く全面に黒釉をかけた杯。浅く挾られた高台内の造形や胎土の特徴から福建省北部の建窯（水吉窯）で生産された製品と考えられるが、やや酸化気味の焼き上がりで、釉は褐色に発色している。建窯は北宋時代から南宋時代末にかけて喫茶用の黒釉碗を生産し、その製品は「建盞」と呼ばれて珍重された。茶碗のほかには本作品のような小杯も盛んに生産した。



18. 黒釉杯

南宋時代（12世紀～13世紀）

高さ3.7、口径8.5、底径3.5

建窯または建窯系

M2229（黒天目酒盃）

M2223と類似した形態の杯であるが、底部は高台部が磨き上げられて平底となっている。釉面には油滴状の斑文が現れている。底部や胎土などの特徴から、建窯の製品ではなく、福建省北部で建窯の模倣品を焼成した他の窯の製品である可能性も考えられる。



はいかつぎてんもく めいせいこ
19. 灰被天目 銘西湖
 元時代～明時代（14世紀後半～15世紀前半）

高さ6.9、口径12.1、底径4.9

茶洋窯

M795（烏蓋天目茶碗 銘西湖）

釉が灰をかぶったような雰囲気をもつため、「灰被」の名で呼ばれるタイプの茶碗。室町時代には主に「天目」と呼称されていた。見込み（内底部）は平坦で広く、高台下の削りこみは浅い。釉は紫色がかかった黒色で、よく見ると釉面に複雑な変化が現れている。福建省南平にある茶洋窯の製品で、日本には数多くの伝世品が残されているほか、沖縄や日本各地の城郭や寺院跡などからの出土例が少なくない。15世紀に成立した『君台観左右帳記（東北大学本）』では「天目、つねのことし。はいかつきを上とする也。上には御用なき物にて候（以下略）」とあり、陶製茶碗の最下位に置かれている。ところが16世紀後半の『山上宗二記』では天目が曜変などより上の第一位を与えられ、評価が逆転していた。本作品は日本国内伝世品である。



せいじれんべんもんわん
20. 青磁蓮弁文碗
 明時代（15世紀後半）

高さ8.8、口径13.8、底径5.5

龍泉窯

M584（人形手青磁茶碗 刻花紋）

外面に線彫りで細目の蓮弁文が描かれた青磁碗。内面には劃花で掬花文が描かれている。全体的に器壁が厚いが、特に底部は肉厚で重量感がある。類品の中国の紀年墓からの出土例には1470年代や1490年代のものがあ、15世紀後半から16世紀初頭の生産年代が推定できる。日本の考古学の世界では細蓮弁文碗と通称されている。





21. 青磁蓮弁文碗

明時代（15世紀後半～16世紀初）

高さ8.4、口径13.5～13.6、底径6.5

福建または広東

M552（青磁茶碗 銘福祿）

No. 20（M584）に類似する線彫りの蓮弁文碗であるが、器形は腰の部分が強く張り出している。内底部中央の円い窪みの中に「寿」字が押印されている。高台内の無釉部分には火色が濃く出ている。器形は肉厚で重量感がある。高台の造形や全体的な器形から、福建省南部や広東省東部で龍泉窯青磁を模して生産された製品と考えられる。



22. 青磁三足炉

元時代～明時代初（14世紀～15世紀初）

高さ16.6、幅23.8、底径（三脚）19.1～19.3

龍泉窯

M1240（青磁三つ足瓶掛）

口縁に向かってやや斜めに直線的に立ち上がる体部に、三本の獣足が貼り付けられた三足炉。底部は下方に突出し、下面は平坦となっている。外底と内底は無釉であり、外側面には三組の複線の沈線文が巡りその間に劃花技法で雲気文が描かれている。底部外面には墨書で「一」と「二」の漢字が書かれており、器の表と裏を示している可能性がある。戦国時代から漢時代の青銅礼器の「温酒尊」を模した器形である。北宋時代後期の汝窯で古代の温酒尊を模した青磁がつくられ始め、南宋時代になると南宋官窯や龍泉窯で青磁温酒尊が盛んに生産され、主に香炉として使用された。





せいじぎょじさんからこほないけ しちかんせいじ
23. 青磁魚耳三唐子花生（七官青磁）
 明時代後期（16世紀～17世紀前半）

高さ25.6～26.0、口径5.5×5.3、胴径9.4、底径8.0
 M1296（青磁鯉耳三閑人□添え花入れ）

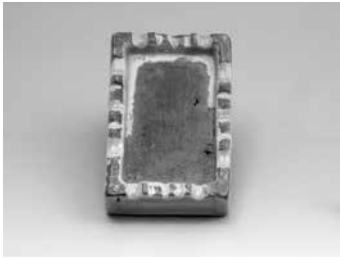
頸の両側に魚形の双耳が貼り付けられた瓶を、腕と足を大きく広げた三人の唐子（中国人の童子）または閑人（俗世を離れた風流人）が背中で支える形態の花生。口縁は四角形に造形されるが、頸部より下は筒形である。日本で「七官青磁」と呼ばれるタイプの明時代後期の中国産青磁である。「七官」の名の由来は、この手の青磁を日本にもたらした人物の名または官位との説があるが詳らかではない。この作品の瓶の部分の形態は日本人が特に珍重した南宋時代の龍泉窯で作られた鳳凰耳花生や鯉耳花生を意識したものであり、明時代後期の中国ではこうした意匠は見られないことから、日本からの注文品である可能性が高い。17世紀前半に景德鎮民窯で日本からの注文によって生産した古染付にも南宋龍泉窯の花生の形態を写した魚耳の高砂花生があることから、同時代の中国への注文品の可能性がある。産地については、七官青磁は龍泉窯製品とする説が一般的であるが、明時代後期の龍泉窯は衰退が著しく上質の青磁の生産が行われていた痕跡はほとんどないことと、本作品の内面には青磁釉ではなく、透明釉が施されていることから景德鎮窯の製品である可能性が高いと考えられる。木箱の状態から明らかに日本国内伝世品であるが、口の部分にはめる銅製の蠟燭受けの部品が伴っており、花生としてだけでなく、燭台としても用いられたことがわかる。箱書きには「青地 火□□」と墨書されていたが、「火□□」を線で消した後に別書体で「花器」と添え書きされている。



せいじぎょじよんからこほないけ
24. 青磁魚耳四唐子花生（七官青磁）
 明時代後期（16世紀～17世紀前半）

高さ23.2、口径5.2、胴径10.0、底径8.8
 M1296（青磁鯉耳四閑人七官花入）

No. 23とほぼ同形であるが、瓶を支える唐子が四人となっている。本作品の内面には青磁釉が施されている。日本国内伝世品で箱書きには墨書で「青磁□花入」とある。



せいじどうじもんすずり
25. 青磁童子文硯（七官青磁）
明時代後期（16世紀～17世紀前半）

総高5.2

（蓋）高さ2.4、幅13.0×8.0

（身）高さ3.0、底径13.0×8.0、凸部11.2×6.4

M2345（青磁人形文硯）

墨溜りに鯉形の貼花文が施された青磁製の硯。蓋の表面には人物文が彫られている。釉はやや緑がかり、発色は淡い。茶の湯の世界で「七官青磁」と呼ばれる中国・明時代後期の青瓷である。七官青磁は龍泉窯の製品とされることもあるが、龍泉窯青磁の輸出は16世紀初頭頃から衰退しており、こうした明時代末期の青磁の茶道具や文房具は龍泉窯青磁ではなく、景德鎮窯で古染付などとともに日本からの注文によって作られた製品である可能性が高い。



せいじおうぎがたごうす せいじひらきおうぎごうごう
26. 青磁扇形合子（青磁開扇香合）（七官青磁）
明時代後期（17世紀前半）

総高3.3

（蓋）高さ1.2、幅6.4×6.2

（身）高さ2.5、口径5.2×5.1、底径5.2×5.2

M1503（青磁扇形香合）

扇形に造形された青磁合子で、蓋の扇面には折枝花文が線彫りされている。安政二年（1855）に出版された『形物香合相撲』番付で、東二段目八位に位置づけられている「サン蓋 青磁 開扇^{ひらきおうぎ}」に近似するが、形態は「半開扇」に近い。本作品の蓋裏には蓋のずれ止めが貼り付けられているが、江戸時代にはこの形態を棧蓋と呼んだ。産地は龍泉窯ではなく、景德鎮窯の可能性が高い。



せいじししがいこうろ
27. 青磁獅子蓋香炉（七官青磁）
明時代後期（16世紀～17世紀前半）

高さ11.5、口径6.3、胴径10.0、底径4.7
M1526（七官青磁獅子蓋香炉）

6条の沈線が配されて瓜形に造形された球形胴に、ユーモラスな獅子像が貼り付けられた蓋が伴う香炉。蓋の獅子の足元と獅子の口には香の煙が出る穴が穿たれている。明時代後期のいわゆる「七官青磁」に類する青磁香炉であるが、産地については龍泉窯とは断定できず、景德鎮窯の可能性もある。



せいじふながたこうろ せいじ しょうごう
28. 青磁舟形香炉（青磁トキヤロ香合）
（七官青磁）
明時代後期（17世紀前半）

総高6.1
（蓋）高さ3.5、幅3.3×4.9
（身）最大高6.7、胴高4.4、口径3.3×3.7、底径3.3×4.9
M1570（七官青磁船形香合）

屋根のついた川船の船尾に人物が坐した青磁香炉。屋根の部分は蓋になっており、船首には円形、船尾は長方形の香の煙出しが配されている。安政二年(1855)に出版された『形物香合相撲』番付で、東五段目十八位に「大小有 青磁 トキヤロ」と記載されたタイプである。トキヤロ＝伽野郎は、船上で夜伽を務める女性の意味で、吾妻船を連想して名付けられたといわれている。本来は香炉として作られた器形であるが、小形品が香合に転用された。産地は景德鎮窯の可能性が高い。





せいじちようかはっせんもんしよくだい
29. 青磁貼花八仙文燭台
 明時代～清時代

針まで含めた総高10.7、高さ8.3、口径13.7、
 胴径14.3、最大幅14.0、底径7.0
 M2311（七言青磁燭台）

碗形で上面が大きく窪み、その中央に小穴をあけて鉄針をはめ込んだ燭台。底部には穴があいており、中は空洞であるが、器壁は肉厚で重い。釉は透明度の高い青白色で、底部の露胎部分には朱色がかった火色が強く現れている。胴部の外側に男性7人、女性1人の人物文が貼り付けられており八仙と思われる。八仙は道教の代表的な8人の仙人で、吉祥文として用いられた。産地と生産年代は詳らかではないが、景德鎮窯あるいは福建省南部の明時代後期から清時代前期頃の製品である可能性が高い。



せいじごりんかきら
30. 青磁五輪花皿
 明時代後期（16世紀）

高さ2.5、口径12.3、底径6.1
 景德鎮窯
 M2219（錫緑青磁梅花皿 10客）

口縁の5個所に刻みを入れ、その下側の体部を屈曲させて五輪花とした青磁皿。口縁には銅覆輪が施されている。同形品の10客組となっているが、その内6点は全面に青磁釉が掛けられているが、4点は高台内の釉が透明釉で白色となっている。景德鎮窯で明代後期の16世紀に生産された青磁である。景德鎮窯は、青白磁や白磁、青花、五彩などで有名であるが、元時代以降には龍泉窯に倣った青磁も生産していた



せいしかきっこうもんわん
31. 青花亀甲文碗
明時代中期（15世紀後半）

高さ6.4～6.7、口径12.4～13.4、底径5.5

景德鎮窯

M775（明代亀甲文碗 染付）

口縁が外反する碗の外部上半に亀甲文、下半に蓮弁文、内底には十字花文、口縁内側に梵字文を青花で描かれている。明時代の中期の15世紀後半頃に景德鎮民窯で生産されたやや粗製の青花磁器碗で、中国国内での流通だけでなく海外にも輸出された。フィリッピンで発見されたレナ沈船（レナ・カーゴ）で、類品がNo. 20（M584）の青磁蓮弁文碗の類品とともに発見されている。



せいかせいおうほじゅうろうじんずばん
32. 青花西王母寿老人図盤
明時代中期（16世紀前半）

高さ4.0～4.2、口径21.4～21.6、底径12.7

景德鎮窯

M1588（古染付寿老人西王母平鉢）

口縁が外反する皿形で、内面中央に鹿を伴った寿老人と桃を手にした西王母が描かれている。どちらも長寿を意味する吉祥文である。内側面には宝珠形の窓が四方に配され、中に「金」「玉」「水」「水」の文字が書かれている。外面には花唐草文がやや粗放に描かれている。



せいかなもんこつぽ
33. 青花花文小壺
明時代後期（16世紀）

高さ7.7、口径3.0、胴径8.5、底径5.7

景德鎮窯

M2233（安南染付振出）

小さな直口がついた肩が張る球形胴の小壺。胴部には花文がやや粗放に描かれている。



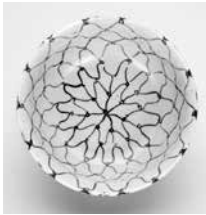
せいかうさぎもんわん
34. 青花兔文碗
明時代末期（17世紀前半）

高さ7.5、口径14.8～15.0、底径5.6～5.7

景德鎮窯

M1367（古染付白兔小鉢）

口縁が外反した碗の内外が縦方向の区画線で5分割され、外面と内底部には草文の中に兔が描かれている。口縁は輪花形で、口縁端部には部分的に「虫喰」と呼ばれる釉の剥がれが認められる。明時代末期、17世紀前半の景德鎮民窯の製品である。



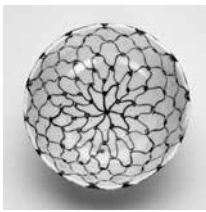
せいかにみめらんわん こそめつけ
35. 青花網目文碗 (古染付)
 明時代末期 (17世紀前半)

高さ7.2~7.3、口径13.7~13.8、底径 6.1

景德鎮窯

M1366 (古染付網目小鉢)

口縁が僅かに外反する碗の内外の前面に青花で網目文が描かれている。口縁には部分的に虫喰が認められる。網目文は明時代の景德鎮窯ではほとんど認められず、日本からの注文によって生産された可能性が高い。日本で「古染付」と呼ぶ明末の景德鎮民窯青花磁器の範疇に含まれる。



36. 青花網目文碗 (古染付)
 明時代末期 (17世紀前半)

高さ5.6、口径13.0~13.3、底径6.0

景德鎮窯

M1366 (古染付網目小鉢)

No. 35と近似した網目文碗であるが、やや小形で口縁は外反せず直口形である。



せいとかことぶきじもんさら
37. 青花寿字文皿
 明時代末～清時代初（17世紀）

高さ2.3、口径10.2～10.5、底径6.2

景德鎮窯

M1656（古染付寿字酒盃）

直口形の皿の内底に二重圈線の中に「寿」字が大きく書かれている。文字は輪郭を呉須の線で描き、その中を濃みで埋めている。底部中央には「福」字が崩れた角福文が配され、高台端部には部分的に砂粒が付いている。明時代末期の景德鎮民窯の特徴を持つが、生産年代は清時代初期まで下がる可能性もある。



ごさいかきもんかくはい
38. 五彩花卉文角杯
 明時代末期（17世紀）

高さ3.7、口径4.6×4.6、底径2.1×2.1

景德鎮窯

M1652（古赤絵角盃）

小形の角杯で、体部の二面を赤絵の七宝繫文で、他の二面を亀甲繫文で埋め、七宝繫文の面に宝珠形の窓絵を配してその中に太湖石と花文を描いている。内底部には枝花文、高台外面には鋸歯文を描く。上絵には赤、黒、緑、青、黄、紫の6色が用いられている。底部外面には、「大明嘉靖年製」の青花銘が書かれている。口縁には部分的に虫喰が認められる。底部には「大明嘉靖年製」銘があるが、官窯製品ではなく明時代末期の民窯製品の可能性が高い。



せいしかきかかくもんろつかくぼん
39. 青花幾何学文六角盤（古染付）
 明時代末期（17世紀前半）

高さ4.3、口径21.7～24.5、底径9.8～11.0

景德鎮窯

M1321（古染付六角菓子器）

高台を含めた全体が六角形の盤で、口縁は罈状に造形されている。内底面中央には宝相華文が線彫りで陰刻されており、口縁部には青花で様々な花文や亀甲文、雷文、連環文などが二段に配されている。外面には、罈部には紋章のような草花文、段の部分には格子文、高台には鋸歯文が描かれている。器壁は厚く、体部の屈曲部には虫喰が多くみられる。典型的な注文手の古染付である。



せいかもみじがたさんそくむこうづけ
40. 青花紅葉形三足向付（古染付）
 明時代末期（17世紀前半）

高さ4.3～4.6、幅15.7×22.0、底径（足間・三つ足）6.5～9.5

景德鎮窯

M1329（染付紅葉形菓子器 閑居雁来）

紅葉形に造形された平鉢。底には粘土紐を屈曲させてU字形にした足が3個貼り付けられている。内面には葉脈が線彫りで陰刻されており、その上に呉須で山水文が描かれている。本来は同形品が組み合わされて茶懷石の膳で向付として用いられたと思われるが、本作品は単独で平鉢として伝世した。器壁は厚く、口縁などに虫喰が多くみられる。注文手の古染付である。



せいかさんすいもんはつかくぼん
41. 青花山水文八角盤（古染付）
明時代末期（17世紀前半）

高さ3.5、口径18.9～20.5、底径8.8

景德鎮窯

M1341（古染付仙境高士図八角菓子器）

口縁を八角に造形した盤であるが、高台は円形である。盤面全体に山水図が描かれ、湖水には3艘の船が浮かび、湖畔には文人（高士）が佇む。俗世を離れた文人の理想世界が描かれている。器壁は厚く、口縁など虫喰が多くみられる。注文手の古染付である。



せいかからようもんはち
42. 青花花鳥文鉢（古染付）
明時代末期（17世紀前半）

高さ5.0、口径14.9×19.0、底径10.1×14.5

景德鎮窯

M1342（呉州藍絵 松皮菱小鉢鳳凰牡丹竹図）

十字方に造形された鉢で、口縁部は鐺状である。内底には岩に佇む鳳凰に似た鳥、牡丹花、竹、太陽などが描かれ、鐺部には連続渦卷文が配されている。呉須の発色はやや暗く、一般的な古染付とはやや異なるが、景德鎮民窯で明時代末期に日本からの注文によって生産されたものであろう。



せいかはちらかんずはっかくぼん
43. 青花八羅漢図八角盤（古染付）

明時代末期（17世紀前半）

高さ5.3～5.5、口径27.2～29.0、底径15.2～15.5

景德鎮窯

M1343（古染付八角仙人鉢）

口縁を八角に造形した盤であるが、高台は円形である。箱書きには仙人とあるが、青花で描かれた人物文の多くが剃髪して僧衣を纏っていることから八羅漢とするのが適切であろう。盤面には羅漢が4場面に分けて配され、上面に龍、下面に虎が描かれている。器壁は厚く、釉面全体にピンホール（空気が抜けた際にできた小穴）が数多く現れている。注文手の古染付である。



せいかさんすいもんわりざんしょうはち
44. 青花山水文割山椒鉢（古染付）

明時代末期（17世紀前半）

高さ5.0～8.3、口径10.0～19.2、

底径（足間・三つ足）10.2

景德鎮窯

M1353（古染付山水蝶図割山椒鉢）

口縁の三方を大きく切り込み、他の三方を屈曲させて輪花形に作り、更に意図的に大きく歪みをつけて造形した鉢。内底部には二重圏線の中に山水文を描き、内側面には蝶文、外側には花文を巡らしている。底部には凸形の足が三方に貼り付けられている。器壁が厚く、重量感がある。日本からの注文によって明時代末期の景德鎮窯で焼かれた製品。



せいかさんすいもんかくざら
45. 青花山水文角皿（古染付）
明時代末期（17世紀前半）

高さ2.5、口径17.3×17.0、底径9.0×9.2

景德鎮窯

M1456（古染付四角皿 仙境高士渡橋図）

口縁を鐔状にした方形の皿で、高台も方形である。内底部の外側に二重線で方形の区画を作り、その内側に山水文を描き、口縁には市松文様が配される。外側面の四方には草花文と雲文が交互に描かれている。器壁が厚く、全体的に歪みがあり、口縁には虫喰が認められる。明時代末期の景德鎮窯で日本からの注文によって焼かれた製品である。



せいかしぎゅうずばん
46. 青花四牛図盤
明時代末期（17世紀前半）

高さ4.5、口径21.1、底径11.5

景德鎮窯

M1464（染付牧童四牛図菓子器）

四頭の牛が二頭ずつ向かい合って描かれ、その脇に牛追いの童子が立つ。牛は角の形態から中国南方に多く見られる水牛と思われる。底部は高台を持たないいわゆる碁笥底で、畳付け部分の釉が剥ぎ取られている。明時代末期の天啓期頃の景德鎮民窯の製品で、「天啓染付」と呼ばれることもあり、類品は比較的多い。





せいかがさいぐんぎゅうずばん てんけいあかえ
47. 青花五彩群牛図盤 (天啓赤絵)
明時代末期 (17世紀前半)

高さ4.2、口径21.4、底径7.3

景德鎮窯

M1351 (天啓色絵群牛図皿)

5頭の牛がユーモラスに描かれ、その背景には岩や草花が配されている。中央の牛のみ座っており、他は立ち姿である。牛の上面には飛鳥が1羽描かれている。外面には花鳥文が2か所に配されている。釉下彩の青花で主要な文様を描いて施釉して高温焼成した後に、赤、黒、緑の三色で上絵を施している。底部は高台を持たないいわゆる基筭底で、畳付け部分の釉が剥ぎ取られている。明時代末期の天啓期頃の景德鎮民窯の製品で「天啓赤絵」と呼ばれ、類品は比較的多い。



せいかがくろがたさんそくむこうづけ
48. 青花柘榴形三足向付 (古染付) 10客
明時代末期 (17世紀前半)

高さ4.0~4.4、口径11.5×16.9、

底径 (足間・三つ足) 6.0~7.0

景德鎮窯

M1460 (古染付柘榴形皿)



柘榴形に型造形された器体に三本の足が貼り付けられた向付。外面の柘榴の茎の脇には小さな葉が型押しされており、外型を用いたことがわかる。内面には青花で枝葉文と柘榴の実の内面が描かれている。器壁は厚く、日本からの注文によって明時代末期の景德鎮窯で焼かれた製品である。

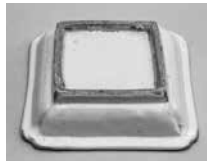


せいかわまきがいがたさんそくむこうづけ
49. 青花巻貝形三足向付（古染付） 5客
明時代末期（17世紀前半）

高さ4.1～4.7、口径11.5×19.0、
底径（足間・三つ足）7.5～9.2
景德鎮窯

M1480（古染付具形海老絵向付）

外型を用いて巻貝形に体部を造形し、底に三本の足を張り付けた向付。盤面には、青花で巻貝の描写が加えられ、下部には海老と水草が描かれている。内外面に青花の吹き墨が施され、アクセントとなっている。器壁は厚く、日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品である。類品は少ない。

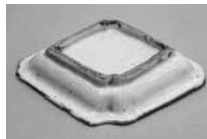


ごさいきかがくもんかくざら
50. 五彩幾何学文角皿（天啓赤絵） 5客
明時代末期（17世紀前半）

高さ3.6、口径13.5×17.2、底径8.4×11.5
景德鎮窯

M1471（万歴赤絵角向付）

口縁が鐔形の角皿で、4つの角は入隅形となっている。白磁の素地の上に赤、黒、青、紫、黄の顔料で上絵が施されている。内底部には菱繋ぎ文の中に、亀甲文や花文などさまざまな文様が配されて、口縁には花唐草文が描かれる。四隅の内側には環珞文が配されている。器壁は厚く、日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品である。



せいかわきつかもんひしがたさら
51. 青花菊花文菱形皿（古染付） 5客
明時代末期（17世紀前半）

高さ3.0～3.3、口径13.0×16.3、底径8.2×10.4
景德鎮窯

M2217（古染付菊図菱形向付 5客）

外型を用いて菱形に造形した皿。口縁は鐔形で、4つの角は入隅形になっている。高台も菱形で、2方が入隅形である。内底面には3輪の菊花、口縁には唐草文が配されている。器壁は厚く、日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品である。口縁部に虫喰が見られ、高台端部には砂が付着するものがある。



せいかにんがづもんさら
52. 青花人物文皿 5客
明時代末期（17世紀前半）

高さ3.0～3.4、口径16.0～16.2、底径10.0～10.2

景德鎮窯

M1457（天啓染付東方朔染付皿）

直口の皿で、内底に果実がついた枝を肩に担ぐ人物文が描かれている。外底部には2重圏線の中に「天啓年製」の青花銘がある。口縁部に虫喰が現れているものや高台に砂が付着するものがある。明時代末期の景德鎮民窯の製品である。



せいかにざくろもんさら
53. 青花柘榴文皿 5客
明時代末～清時代初（17世紀）

高さ2.4、口径9.7、底径4.7

景德鎮窯

M2221（古染付佛手柑小皿 5客）

直口の皿で、内底面に柘榴と思われる果実をつけた樹木が描かれている。多くの種子ができる柘榴は、子孫繁栄の吉祥文として好まれた。明時代末期から清時代初期の景德鎮民窯の製品である。



せいにかきつかもんわん
54. 青花菊花文碗（古染付）
明時代末期（17世紀前半）

高さ7.7、口径11.6～13.0、底径8.3

景德鎮窯

M1393（古染付菊絵火入れ）

直口縁で、やや膨らみをもった体部に高台がつく碗。胴部外面には青花で菊花文が不規則に配され、高台には鋸歯文が巡る。器壁は厚く、口縁には虫喰が現れている。日本からの注文によって明時代末期の景德鎮窯で焼かれた製品である。銅製の火屋が伴い、火入れとして伝世したが、本来は茶碗として制作された可能性が高い。



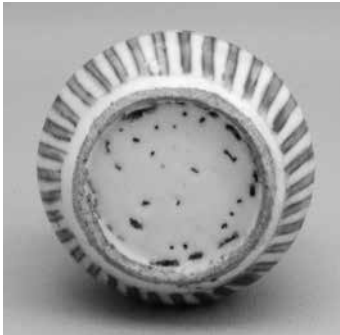
せいかりがくもんこつぽ
55. 青花幾何学文小壺 (古染付)
明時代末期 (17世紀前半)

高さ6.4~6.5、口径5.5、底径4.8

景德鎮窯

M1410 (古染付鶴くび茶器 木地蒔絵蓋 シマ柿替蓋)

胴部が「く」字形に張り出し、太い頸部が直線的に上にのびる器形の小壺。口縁の部分は擦られて短くなっており、擦った断面には藍色の顔料で彩色されている。頸部には青花で亀甲文、胴部には縦縞文、口縁部には鋸歯文が施されている。塗蓋が伴っており、茶入として用いられたものである。器壁は厚く、日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品である。



せいかりゅうもんはち
56. 青花龍文鉢 (古染付)
明時代末期 (17世紀前半)

高さ9.0~9.3、口径21.0~21.8、底径16.4

景德鎮窯

M1184 (古絵付龍絵水指)

胴部が膨れ、口縁が大きく外反する鉢。内底部中央に青花で四爪龍、その周りには雲気文、下部には波濤文が描かれる。口縁の上面には菊花唐草文が巡り、外面には花卉文や虫文などが描かれている。器壁は厚く、口縁部には虫喰が現れている。日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品である。





せいかさんすいもんすいちゅう
57. 青花山水文水注（古染付）

明時代末期（17世紀前半）

総高17.3

（蓋）高さ2.4、幅11.2～12.6

（身）口径11.2、注ぎ口径1.2×1.5、胴径18.5、底径10.4

景德鎮窯

M1188（南京手付山水図水指）

丸く張り出した胴に直線的に立ち上がる口頸部、S字形に屈曲した注口、提梁形の提手をもつ大形の水注。蓋は盤形で、上部中央に粘土紐を逆U字に曲げた鈕がつく。胴部には青花で山水文が大きく描かれ、注口や提手には花唐草文が配されている。器壁が厚く、各所に虫喰が現れている。日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品である。塗蓋が伴っており、手附水指として用いられたことがわかる。



せいかおうからんへい
58. 青花桜花文瓶（古染付）

明時代末期（17世紀前半）

高さ17.4、口径3.0、胴径（上段）8.1、（下段）8.6、底径6.6

景德鎮窯

M1634（古染付桜川の平德利）

瓢形の胴に細くのびた頸がつく徳利形の瓶。底部は屈曲して外に広がり、その下に高台が付く。頸部には細長い蕉葉文が巡り、胴部には桜花が不規則に配される。高台外側面には鋸歯文が巡る。下部球形胴の肩の部分3か所に窪みが意図的に設けられている。器壁が厚く、各所に虫喰が現れている。日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品である。



せいからちようもんへい
59. 青花花鳥文瓶
明時代末期（17世紀前半）

高さ41.5、口径13.9、胴径19.6、底径13.3
景德鎮窯
M1294（古染付花鳥図花瓶）

頸の左右に獣首がつく尊形の大形花瓶。口縁には岩に梅樹、首には窓絵に蟠螭文、胴部には雉（または山鳥）、牡丹花、梅花、鳥、太湖石などが描かれている。器壁が厚く、各所に虫喰が現れている。日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品と思われる。



せいからくさもんひさごがたへい
60. 青花唐草文瓢形瓶
明時代末期（17世紀前半）

高さ41.5、口径4.3、胴径（上段）13.4、（下段）20.0、底径13.0
景德鎮窯
M1259（古染付瓢形）

瓢形の体部に小口と大きく開く高台がついた大形の瓶。文様は複数の文様帯から構成され、口縁部には下向きの蕉葉文、その下には下向きの蓮弁文、上部球形胴には花唐草文、その下の屈曲部には各種の花文や葉文、卍文などが描かれ、下部球形胴の上にはラマ式蓮弁文、胴側面には花唐草文、胴下部には上向きの蓮弁文、高台部には蓮弁文が変化した縦縞文が配されている。器壁は厚く、各所に虫喰が現れている。日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品と思われる。





61. 青花アラビア文字文盤
明時代末期（17世紀前半）

高さ9.6、口径59.4～59.6、底径38.6

景德鎮窯

M1720（染付大込）

直口の大形盤。内底面中央に崩れたアラビア文字文が書かれ、その周りに鶴、桃などの長寿を祈る吉祥文と唐草文が配されている。外面にはやはり鶴、桃、唐草文が描かれ、口縁外側には「大明嘉靖年製」の青花銘があるが、生産年代は明時代末期まで下がる。口縁には虫喰が現れ、器壁は厚い。高台内は無釉である。



62. 青花幾何学文碗（祥瑞）
明時代末期（17世紀前半）

高さ7.6～7.9、口径8.8～10.5、底径6.8

景德鎮窯

M798（祥瑞染付け茶碗）

筒形の碗形を意図的に歪めて6角状に造形している。口縁内外面には中に花文を配した鋸歯文を巡らせ、外側面には、花形の窓絵を配し、亀甲文、七宝文、青海波文、卍崩し文、菱文、市松文などで埋めている。高台外側には鋸歯文が巡り、高台内には角福銘がある。口縁には虫喰があり、露胎部分の胎土には黒色の粒子が含まれる。明時代末期の景德鎮民窯で生産されたいわゆる祥瑞手の製品である。





63. 青花幾何学文碗（祥瑞）

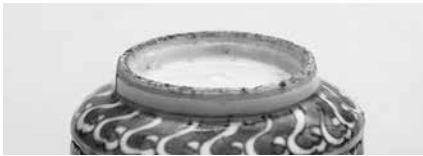
明時代末期（17世紀前半）

高さ7.5、口径7.1、胴径7.7、底径4.8

景德鎮窯

M1582-2（青花幾何学文筒形茶碗祥瑞）

胴部に二条の突帯を巡らせた祥瑞の筒形茶碗。祥瑞は明末期に日本からの注文によって中国・景德鎮窯で焼かれた青花磁器で、白色の胎土と鮮やかな呉須の発色、幾何学文などを多用した文様構成、中国には見られない日本人好みの器形などが特徴である。「五良大甫 呉祥瑞」の青花銘が入れたものがあることから「祥瑞」の名で呼ばれる。江戸時代に京焼や瀬戸窯で模倣品が盛んにつくられたが、本作は景德鎮の「祥瑞」である。



64. 青花鶏文杯 5客

明時代末期（17世紀前半）

高さ6.7、口径7.4、底径3.4

景德鎮窯

M1550（古染付母鶏茶碗 5客）

直口でやや器高の高い杯。外面に鶏と草花文が描かれる。底部下面には、4点には青花の「吉」の文字、1点には「礼」の文字が書かれている。口縁には虫喰が目立つ。日本の煎茶の世界で茗碗として用いられ伝世したものである。





せいからんはい
65. 青花草花文杯 5客
明時代末期（17世紀前半）

高3.9、口径6.2、底径2.3

景德鎮窯

M2373（染付蘭絵煎茶碗 5客）

口縁が外反する杯で、外面に青花で草花文が描かれる。内底部には圈線と崩れた小さな花文が配されている。底部は無釉で、高台の畳付は幅広でやや斜めに削られている。無釉の高台内には「十八」の文字が墨書されている。明時代末期の景德鎮民窯の製品で、日本の煎茶の世界で茗碗として用いられ伝世したものである。



せいこうしずはい
66. 青花高士図杯 5客
明時代末～清時代初（17世紀）

高さ4.7、口径9.8、底径7.5

景德鎮窯

M1474（成化年製染付二高士談笑図汲出茶碗）

体部が大きく外反する杯。外面には青花で二人の高士（文人）を中心に、その背景に岩、樹木、山を配した山水を描いている。底部には2重圈線の中に「大明成化年製」の青花銘があるが、本品の生産年代は明時代末期から清時代初期の17世紀である。景德鎮民窯の製品で、日本の煎茶の世界で茗碗として用いられ伝世したものである。





せいかりもんこうす
67. 青花鳥文合子
 明時代後期（16世紀後半）

総高4.7

（蓋）高さ2.2、口径6.4

（身）高さ3.0、口径5.7、底径4.3

漳州窯

M2258（染付宋胡禄風合子）

底部に高台がついた球形の合子。蓋の上面に青花で鳥文が描かれている。『形物香合相撲』番付には掲載されていないタイプであり、日本の伝世品ではなく、東南アジアから近年日本にもたらされたものである可能性が高い。明時代後期に福建南部の漳州窯で生産された製品である。



せいかりちゅうろつかくこうす
68. 青花鳥鈕六角合子（古染付）
 明時代末（17世紀前半）

総高4.1

（蓋）高さ2.2、直径4.0×4.6

（身）高さ3.2、口径4×4.6、底径2.8×3.2

景德鎮窯

M1499（古染付六角香合 都鳥つまみ）

蓋に小さな鳥形の鈕がついた六角形の合子である。蓋の側面と身の側面に青花の鋸歯文が巡る。『形物香合相撲』番付には掲載されていないタイプであるが、日本国内の伝世品であり、日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品である。





せいかさうぎょもんこうす
69. 青花双魚文合子（古染付）
明時代末（17世紀前半）

総高2.8

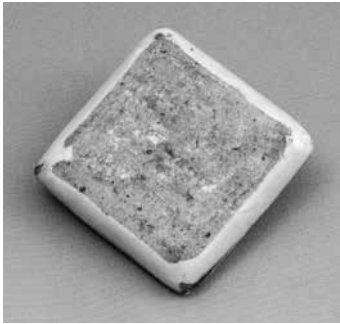
（蓋）高さ1.8、幅4.4×4.5

（身）高さ1.1、口径3.8×3.8、底径3.9×4.0

景德鎮窯

M1506（南京染付双魚文香合）

方形の合子の蓋に粘土紐を曲げた鈕が張り付けられている。蓋の上面には鈕に並行して2匹の魚が描かれている。文様は異なるが同じ形の合子が安政二年（1855）に出版された『形物香合相撲』番付において、「染附 隅田川」香合の名で西四段目十四位に位置づけられている。日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品である。



せいかえびがたこうす
70. 青花海老形合子（古染付）
明時代末（17世紀前半）

総高2.5

（蓋）高さ1.5、幅2.9×4.8

（身）高さ1.3、口径1.5×2.9、底径2.1×2.9

景德鎮窯

M1515（古染付海老香合）

海老の形を象った合子。青花で海老の細部が描写されている。安政二年（1855）に出版された『形物香合相撲』番付において、「染附 小海老」の名で西四段目二十三位に位置づけられている。日本からの注文によって明時代末期の景德鎮民窯で焼かれた製品である。





せいふじばなもんごうす
71. 青花藤花文合子

明時代後期～明時代末期（16世紀末～17世紀前半）

総高8.2

（蓋）高さ4.0、胴径7.8

（身）高さ4.7、口径6.5～6.7、底径4.0

漳州窯

M1397（明代染付下がり藤香合）

蓋に宝珠形の小さなつまみがついた球形の合子。沈線で6分割されて瓜形となり、6方に藤花文が描かれている。『形物香合相撲』番付には掲載されていないタイプであり、日本の伝世品ではなく、東南アジアから近年日本にもたらされたものである可能性が高い。明時代後期に福建南部の漳州窯で生産された製品である。



せいかさぎくきもんごうす
72. 青花鷺草文合子

明時代後期～明時代末期（16世紀末～17世紀前半）

総高7.0

（蓋）高さ3.0、胴径8.9～9.3

（身）高さ4.4、口径8.0、底径5.5

漳州窯

M1398（染付面取水草鷺文合子）

八角に造形された合子。蓋の上面に青花で鷺と草花文が描かれている。『形物香合相撲』番付には掲載されていないタイプであり、日本の伝世品ではなく、東南アジアから近年日本にもたらされたものである可能性が高い。明時代後期に福建南部の漳州窯で生産された製品である。





そさんさいはなもんごうす こうちさんさい
73. 素三彩花文合子（交趾三彩）
 明時代後期～明時代末期（16世紀末～17世紀前半？）

総高2.8
 （蓋）高さ1.4、胴径4.6～4.9
 （身）高さ1.7、口径4.0～4.5、底径2.5

漳州窯
 M1436（交趾 三彩香合）

素三彩とは高温で焼成した磁胎の上に鉛釉をかけて再び800度前後で焼いた製品である。本作品は蓋の上面に花文を陰刻しその上に緑釉と黄釉、紫釉を掛け分けている。『形物香合相撲』番付には掲載されていないタイプであり、日本の伝世品ではなく、東南アジアから近年日本にもたらされたものである可能性が高い。明時代後期に福建南部の漳州窯（田坑窯）で生産された製品である。



せいかりんもんごうす
74. 青花魚鱗文合子
 明時代後期～明時代末期（16世紀末～17世紀前半）

総高4.4
 （蓋）高さ2.4、胴径4.6
 （身）高さ2.4、口径3.7、底径2.9

漳州窯
 M1571（泉州松笠香合）

宝珠形の合子で、全面に青花で魚鱗文が描かれている。安政二年（1855）に出版された『形物香合相撲』番付において、「大小有 泉州 松毯」の名で西四段目一位に位置づけられている。明時代後期に福建南部の漳州窯で生産された製品である。





せい か そう かん へい
75. 青花草花文瓶
明時代後期（16世紀後半）

高さ19.1、口径9.4、胴径10.0、底径4.0

漳州窯

M1262（古伊万里染付佛器形華瓶）

喇叭形の口縁とスカート状にひらく底部をもつ瓶。胴部側面には枝花文、頸部には草文、底部には簡略化された花文が、ざっくりとした筆致で描かれる。日本では「呉州手（呉洲手）」と呼ばれた福建省南部の漳州窯で生産された粗製の青花磁器で、主に輸出用に生産された。

ご さい か ち ょ う も ん は ち ご す あ か え
76. 五彩花鳥文鉢（呉州赤絵）
明時代後期～明時代末期（16世紀末～17世紀前半）

高さ6.3、口径21.8、底径9.8

漳州窯

M2237（呉州赤絵甲鉢）

口縁が鐙形のこの形態の鉢を、日本では兜鉢（甲鉢）と呼んでいる。高温で焼成した白磁素地の上に赤、黒、緑の三色の上絵で器面全体に文様を描いている。内底部に花鳥、内側面には蓮花、口縁部には格子文を地に窓絵の花文と赤玉文を配している。高台には目の粗い砂が付着している。明時代後期頃に福建省南部の漳州窯で焼かれた五彩磁器であるが、漳州窯の五彩は日本では呉州赤絵と呼ばれて珍重された。



かつゆうこつからくきもんしじこ
77. 褐釉刻花唐草文四耳壺
 明時代（15世紀～16世紀）

高さ34.5、口径10.5、胴径30.0、底径13.1
 石湾窯
 M2211（安南褐釉刻花文四耳壺）

胴部全面に唐草文を線彫りで陰刻し、褐釉を掛けた四耳壺。このタイプはかつてベトナムなど東南アジアの製品とされたこともあるが、近年広東省の石湾窯の製品であることが明らかとなった。石湾窯の四耳壺は日本では茶葉を保管する茶壺として珍重されたが、刻花文のあるタイプの伝世品はあまり知られていない。



こくゆうしじこ
78. 黒釉四耳壺
 明時代後期（16世紀）

高さ34.7、口径13.0、胴径31.2、底径12.7
 石湾窯
 M2210（安南黒釉四耳壺（ベトナム））

光沢がある黒釉が全面にかけられた四耳壺。明時代後期に広東省石湾窯で焼かれた製品である。日本伝世品ではなく、近年東南アジアからもたらされたものと思われる。こうした四耳壺はかつて呂宋壺（ろもん）の名で珍重された。



さんさいしやちんすいぢゆう
79. 三彩鮫文水注
清時代（18世紀～19世紀）

総高15.8

（蓋）高さ3.1、直径6.2

（身）高さ9.3、口径6.0、胴径9.4、最大幅14.3、

底径7.0～7.6

石湾窯

M1556（交趾保富羅）

鉛釉の黄釉と緑釉が掛け分けられた水注で、胴部は型作りによって作られた左右二つの部分が貼り合わされている。黄釉が掛けられた窓絵の部分には梅、牡丹、蓮、菊などの花があらわされ、吊り手は竹の意匠である。清時代後期に広東の石湾窯で作られた製品であり、江戸後期に「新渡（しんわたり／しんと）」物として輸入され、煎茶では交趾水注として珍重された。



しき ちゃこ しでいちゃちよう
80. 紫砂茶壺（紫泥茶鉢）
清時代（18世紀～19世紀）

総高5.8

（蓋）高さ2.8、直径4.6

（身）高さ4.0、口径4.2、胴径5.9、最大幅10.0、

底径4.9

宜興窯

M2245（清香 朱泥急須）

胴が小さく膨らみ、蓋受け部分が短く立ち上がった「壺式」と呼ばれる胴部に、屈曲した注口が付いた後手の茶壺。全体的に作りが精緻で、把手の下側に小さな葉形の印、蓋裏には「清香」印が押され、底部下面には「乾隆八年製 周□」の彫銘がある。「周」の次の文字は「候」または「侯」、あるいは「族」にも読めて不詳である。乾隆八年は1744年にあたるが、「清香」印の文字は清時代末期から中華民国時代初期（19世紀末～20世紀前半）の雰囲気がある。



81. 紫砂茶壺（烏泥茶銚）^{うでいちやちよう}

清時代（18世紀～19世紀）

総高7.1

（蓋）高さ2.2、直径4.2

（身）高さ5.2、口径3.7、胴径6.8、最大幅9.7、底径4.3

宜興窯

M1596（烏泥梨皮俱輪玉急須）

中国を代表する紫砂の産地である宜興窯で作られた茶壺（茶銚）。一見、轆轤で挽かれたような端正な姿であるが、粘土板を筒状に巻いて羽子板状の木の工具で叩いて造形する、「打身筒」と呼ばれる技法による。球形胴に短い注口（鉄砲口）が付き、宝珠つまみのある笠形の蓋をもつこの形の茶壺を、日本では「俱輪珠（具輪珠）」と呼んで珍重した。素地に砂粒を埋め込んで梨の地肌のような雰囲気を出す「梨皮泥」と呼ばれる技法が用いられているが、その上に炭素を吸着させて漆黒の素地に仕上げている。



82. 湯罐（保富羅・御所柿手）^{とうかん ほうふら ごしょがきて}

清時代（18世紀～19世紀）

総高9.1

（蓋）高さ2.1、直径5.7

（身）高さ7.8、口径6.2、胴径9.8、

長さ（取手まで）14.0、底径8.5

福建南部

M1555（古渡保富羅 御所柿 急須）

轆轤で非常に薄く引き上げられた素焼きの湯罐である。底部は火の当たる部分の面積を広くするためにドーム状になっている。一九世紀前半頃に輸入された「文政渡」と呼ばれる湯罐は、胴部の形態や蓋の形態、胎土から、「白玉手」「御所柿手」「宝珠」「椎殻」「南瓜」「へたり」などさまざまな分類されている。本作品は、赤色の素地や柿の実に似た胴部のふくらみから「御所柿手」と呼ばれるタイプにあたる。広東や福建など中国南部の製品と思われるが、産地は明らかでない。



せいかにんじんはい
83. 青花梵字文杯
清時代（18世紀～19世紀）

高さ3.3、口径4.7、底径2.9

徳化窯

M1558（染付南京煎茶茶碗 5客）

外面に二段にわたって形式化した梵字文が巡らされた青花杯。清時代後期の福建省徳化窯の製品で、江戸時代後期にこうした粗製の青花杯が新渡物として盛んに輸入され、煎茶器として珍重された。煎茶の茗碗として使われた徳化窯の杯には、白磁や五彩の製品も少なくない。



せいかにんじんはい
84. 青花梅花文碗
清時代（18世紀～19世紀）

高さ6.2～6.5、口径11.7～12.8、底径4.7

徳化窯系

M797（染付雲文茶碗）

体部の外面に崩れた梅花文が描かれた碗。内底部には「日」字が小さく書かれている。徳化窯または福建南部から広東東部に広がる徳化窯系の陶磁産地の製品である。



せいからくきもんすいちゅう
85. 青花唐草文水注

清時代（19世紀）

総高9.3

（蓋）高さ2.1、直径6.4

（身）高さ8.8、口径5.1、胴径9.5、最大幅12.9、底径7.3

景德鎮窯

M1593（染付共蓋酒次）

釣手を別途取り付ける形態の水注。肩の部分の前後に釣手をはめる二穴の耳が付き、本作では金属製の釣手が配されている。胴部に牡丹花と唐草文、胴の上下に蓮弁文、頸部には草文が描かれている。茶漉穴は2穴で上下に配されている。清時代後期の景德鎮窯民窯の製品である。



らんゆうばん
86. 藍釉盤

清時代（18世紀～19世紀）

高さ4.0、口径22.9、底径12.3

景德鎮窯

M1335（南京吹墨平鉢）

藍釉を吹墨の技法で掛けた盤。釉面には吹墨による粒子の動きが見られる。高台内は透明釉が掛けられていて白色を呈している。清時代後期以降に景德鎮民窯で生産された製品である。





せいかにのはがたさんそくむこうづけ
87. 青花木葉形三足向付（古染付）
 清時代後期（18世紀～19世紀）

高さ4.1、口径11.8×19.1、底径（足間・三つ足）6.9～7.7
 景德鎮窯

M1462（古染付木葉形昆虫絵図皿）

型を用いて葉形に造形し、外底には三本の足が貼り付けられている。内面には葉脈と蟬、蝶、イナゴ、トンボなどの昆虫が描かれている。器壁は肉厚で、口縁には虫喰が少なくない。木村定三コレクションの他の古染付とは様相が異なる。清朝後期に日本人が景德鎮窯に注文した「新渡物」の範疇に含まれる可能性が高い。



ちやようまつゆうへい
88. 茶葉末釉瓶
 清時代末～民国以降（19世紀～20世紀）

高さ32.9、口径7.6、胴径23.8、底径15.1
 景德鎮窯

M1258（青蕎麦花入）

器面全体に茶葉末釉をかけた下蕪形の瓶。底部に「大清乾隆年製」の印刻銘があるが、生産年代は清末以降に下ると思われる。





No. 6 《青磁蓮弁文碗》 南宋時代末～元時代（13世紀後半～14世紀初）
龍泉窯 M1141



No. 8 《青磁双魚文鉢》 南宋時代後期～元時代（13世紀後半～14世紀初）
龍泉窯 M1332



No. 15 《黑釉鉄彩草花文瓶》 金時代（12世紀～13世紀） 磁州窯系
M1679



No. 19 《灰被天目 銘西湖》 元時代～明時代（14世紀後半～15世紀前半）
茶洋窯 M795



見込



底面



《ぐりもんついこくてんもくだい屈輪文堆黒天目台》(M772) と組み合わせた姿



内箱・外箱



No. 22 《青磁三足炉》 元時代～明時代初（14世紀～15世紀初） 龍泉窯 M1240



No. 23 《青磁魚耳三唐子花生（七官青磁）》（左）
No. 24 《青磁魚耳四唐子花生（七官青磁）》（右）
明時代後期（16世紀～17世紀前半） M1296



No. 27 《青磁獅子蓋香炉（七官青磁）》
明時代後期（16世紀～17世紀前半） M1526



No. 32 《青花西王母寿老人图盘》 明時代中期（16世紀前半） 景德鎮窯 M1588



No. 43 《青花八羅漢八角盤（古染付）》
明時代末期（17世紀前半） 景德鎮窯 M1343



No. 49 《青花卷貝形三足向付（古染付）5客》 明時代末期（17世紀前半）
景德鎮窯 M1480



No. 45 《青花山水文角皿（古染付）》 明時代末期（17世紀前半） 景德鎮窯 M1456



No. 50 《五彩幾何学文角皿（天啓赤絵）》 5客のうち1客 明時代末期（17世紀前半）
景德鎮窯 M1471



No. 56 《青花龍文鉢（古染付）》 明時代末期（17世紀前半） 景德鎮窯 M1184



No. 57 《青花山水文水注（古染付）》 明時代末期（17世紀前半）
景德鎮窯 M1188



No. 62 《青花幾何学文碗（祥瑞）》 明時代末期（17世紀前半）
景德鎮窯 M798



No. 76 《五彩花鳥文鉢（吳州赤繪）》
明時代後期～明時代末期（16世紀末～17世紀前半） 漳州窯 M2237



No. 79 《三彩鯢文水注》
清時代（18世紀後半～19世紀） 石灣窯 M1556